

トリック・ダイジェスト』を対象とし、掲載記事や読書欄から雑誌の特性を示し、戦後日本におけるカトリックの文脈に遠藤を位置付けました。報告者がそれぞれの関心から、作家の特定の時期を検討する本シンポジウムの試みは、大変実りのある有意義な時間となりました。

▼機関誌『遠藤周作研究』第十七号の投稿論文を募集します。投稿申し込みは、十二月末までに事務局へお願いいたします。機関誌の最後にある投稿規定をご覧のうえ、会員の方々の意欲的な投稿が多く寄せられることをお待ちしております。なお、第十七号より、原稿提出時の印刷原稿の郵送は不要とし、ファイルを添付したメールを送付するのみで可とします。

▼今後開催予定のオンライン国際学術交流会の生誕一〇〇周年企画については、役員会にて検討し、詳細はメールにてご連絡いたします。

▼次回の研究発表の申込みは来年五月末日締切りです。三月に改めて募集のお知らせをいたします。

▼次回の大会は、神奈川県立近代文学館にて行われます。遠藤がフランス留学へと旅立った横浜港の近くにある神奈川県立近代文学館にて、留学期を中心とした一九五〇年代の遠藤の歩みを検討するシンポジウムを行う予定

定です。多くの学会員が集い、充実した研究発表がなされ、盛会となりますことを期待します。

▼最後に学会員の方々にご協力のお願があります。機関誌の「遠藤周作参考文献目録及び研究展望」は、佐藤まどか氏が担当されますので、遠藤周作に関する会員の方々の論文はもちろん、入手できた参考文献についての情報を、佐藤氏に直接お知らせください (E-mail: phantasieOderkat3madoka@gmail.com)。また、これまでの参考文献目録について遺漏のある場合も、ご連絡をお願いします。

(文責 会報担当 増田斎)

遠藤周作学会 事務局

〒807-8586

福岡県北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1

九州女子大学 古浦修子研究室内

TEL: 093(693)3348

E-mail: soyomilk@titan.ocn.ne.jp

遠藤周作学会 会報

第 18 号

2023 年 11 月 18 日

発行 遠藤周作学会

代表 山根道公

二〇二三年度遠藤周作学会・全国大会

総会報告

事務局より

◇第十七回二〇二三年度遠藤周作学会・全国大会開催

第十七回二〇二三年度遠藤周作学会・全国大会は、二〇二三年九月九日(土)に、昭和女子大学にて開催され、併せて Zoom ミーティングを用いたオンライン配信も実施された。

役員会は九月三日(日)二〇時からオンラインにて行われた。九日は十三時に本学会代表、山根道公氏による開会の辞が述べられた。まず、以下のプログラムの通り、総会から始まった。その後、二本の研究発表が行われ、日本女子大学の渡部麻実氏、南山大学非常勤講師の北田雄一氏、明治学院キリスト教研究所協力研究員の増田斎によるシンポジウムが行われた。大会進行役は上智大学キリスト教文化研究所の香川雅子氏と九州女子大学の古浦修子氏が担当した。

プログラム

【総会】

遠藤周作生誕一〇〇年記念アンケート集計報告

遠藤周作学会会員 佐藤まどか

【研究発表】

① 『沈黙』におけるロドリゴの「信仰の飛躍」

—キルケゴールの宗教的実存の観点から—

東華大学大学院修士課程修了 葛 欣怡

司会 フェリス女学院大学名誉教授 宮坂 覺

② 遠藤周作と戦後派作家

—椎名麟三を中心として—

京都外国語大学 長濱 拓磨

司会 山梨英和大学名誉教授 川島 秀一

【シンポジウム】

遠藤周作の文学的出発—評論活動開始前後(一九四〇

年代、一七〇二六歳)

① 堀辰雄と遠藤周作、二人の読書

日本女子大学 渡部 麻実

② 批評家遠藤周作の出發

——雑誌『四季』とその周辺——

南山大学非常勤講師 北田 雄一

③ 「戦中派キリスト教作家」の出發点

——雑誌『カトリック・ダイジェスト』と

遠藤家との関係を中心に

明治学院キリスト教研究所協力研究員 増田 斎

司会 ノートルダム清心女子大学 山根 道公

【総会】

総会の議長は、事務局長の古浦修子氏が兼務し、報告・計画の説明を行った。まず、二〇二二年度事業報告がなされた。内容は次のとおり。

◆ 第十六回二〇二二年度遠藤周作学会・全国大会をZoomミーティングによるオンラインにて開催。会員五〇名の参加があった。

◆ 機関誌『遠藤周作研究』第十六号発行。第十六号は八篇の論稿、一篇の研究ノート、三篇の書評、佐藤まどか氏による遠藤周作生

一日(土)に神奈川県立近代文学館にて開催予定。

◆ 連携担当役員今井真理氏より、遠藤周作生誕一〇〇年に関連して、長崎市遠藤周作文学館・町田市民文学館ことばらんど・周作クラブ等でさまざまな記念イベントがあること、単行本未収録のエッセイ集などの刊行が予定されていることが案内された。

最後に遠藤周作学会副代表の笛木美佳氏の閉会の辞をもって全国大会の日程を終了した。その後、懇親会に代わる歓談の場が設けられた。対面での学会開催は二〇一九年度以来であり、参加者が直接顔を合わせて交流する約四年ぶりの時間は、終始和やかな会となった。

◇ 事務局より

▼第十七回遠藤周作学会・全国大会は、対面実施とオンライン配信といったハイブリッド形式で行われました。発表者の熱のこもった肉声が会場に響き、途切れることなく質疑応答がなされていたことが印象的でした。また、発表時間だけではなく、休憩時間や歓談の場への移動時間など、ふとした瞬間にそこそこで対話が生まれていた

誕一〇〇年記念アンケートの報告、増田斎による研究展望を収録。会員数は、二〇二三年九月時点で一〇四名。

◆ 会費長期末納者六名を会員名簿から削除した。

◆ 遠藤周作学会会員の佐藤まどか氏が遠藤周作生誕一〇〇周年記念アンケートの実施に関する報告を行った。

◆ 古浦修子氏により二〇二二年度の会計報告がなされ、承認された。

続いて、事務局より二〇二二年度事業計画が示された。内容は次のとおり。

◆ 二〇二三年度は役員改選の年に当たり、新役員に香川雅子氏が推薦、承認された。研究展望は佐藤まどか氏が担当する。

◆ 機関誌『遠藤周作研究』次号(第十七号)は今回の発表者の原稿を掲載予定。次号より、原稿提出時の印刷原稿の郵送は不要とし、ファイルを添付したメールを送付するのみで可とする。

◆ 二〇二四年度の大会は、二〇二四年九月二十

ことも、やはり対面実施ならではの良さだと感じます。ハイブリッド形式での開催のためにご尽力くださいました会場校の笛木美佳氏と、お手伝いくださった学生の皆様に、改めて御礼申し上げます。

▼今回の大会の研究発表は、二名の発表者によって行われました。まず、宗教哲学の理論を用いた作品論と、次に、同時代に活躍した作家との比較や活動拠点としていた土地に言及した作家論が展開され、新たな視点や解釈を提示する刺激的な発表の場となりました。充実した内容が、機関誌にまとめられますことを楽しみにしています。

また、シンポジウムでは、遠藤周作の生涯を段階的に捉える連続企画を立て、今回は一九四〇年代を中心とした遠藤周作の文学的出發の検討を行いました。山根道公氏が遠藤の年譜について解説を加えてくださった後、渡部麻実氏が、堀辰雄との関係を中心に、蔵書の書き込み資料から彼らの「読書ネットワーク」を明らかにしてくださいました。北田雄一氏は、遠藤の批評家として出發点を捉えるため、堀辰雄と野村英夫との関係性などを踏まえ、「師」である神西清論を検討されました。増田斎は、遠藤がフランス留学前後に編集に関わった雑誌『カ